

令和7年度  
尼崎市文化ビジョン（第2次）推進懇話会  
報告書

令和8年6月

尼 崎 市

## 1 趣旨

文化芸術基本法では「地方公共団体は、基本理念にのっとり、文化芸術に関し、国との連携を図りつつ、自主的かつ主体的に、その地域の特性に応じた施策を策定し、及び実施する責務を有する。」と定められています。

こうしたなか、尼崎市では本市の最上位計画にあたる「尼崎市総合計画」の分野別計画として、平成29年に尼崎市文化ビジョンを策定しました。その後、令和4年度に改定を行い、令和5年度から令和14年度までを取組期間とする「尼崎市文化ビジョン（第2次）」（以下「ビジョン」という。）を策定しました。改定にあたっては、「第6次尼崎市総合計画」の中で文化施策の位置づけが「地域コミュニティ・学び」の一施策となったことを受け、狭義の「文化」にとどまらない取組をしていくこととし、3つ目の取組の柱に「学び・楽しみ・交流する市民を支える」を掲げました。令和8年度組織改正においては、協働部門、文化・人権部門及び地域部門を集約した地域協働局が新設され、横断的な総合調整機能を強化し、地域力をさらに高めていくことを目指しています。

ビジョンの評価にあたっては、「本市の取組の柱」に基づく取組を定性的な視点からも評価することとしております。そのため、「尼崎市文化ビジョン（第2次）推進懇話会」（以下「懇話会」という。）において聴取した市民や専門家等の第三者からの意見を参考に、取組の効果を検証し、施策評価に反映することで、PDCAサイクルを通じて効果的な文化施策の展開を図っていきます。

## 2 懇話会について

懇話会は、学識経験者や文化活動を行っている者等から構成され、文化事業等に関する意見交換を行います。

### 尼崎市文化ビジョン（第2次）推進懇話会 委員（50音順）

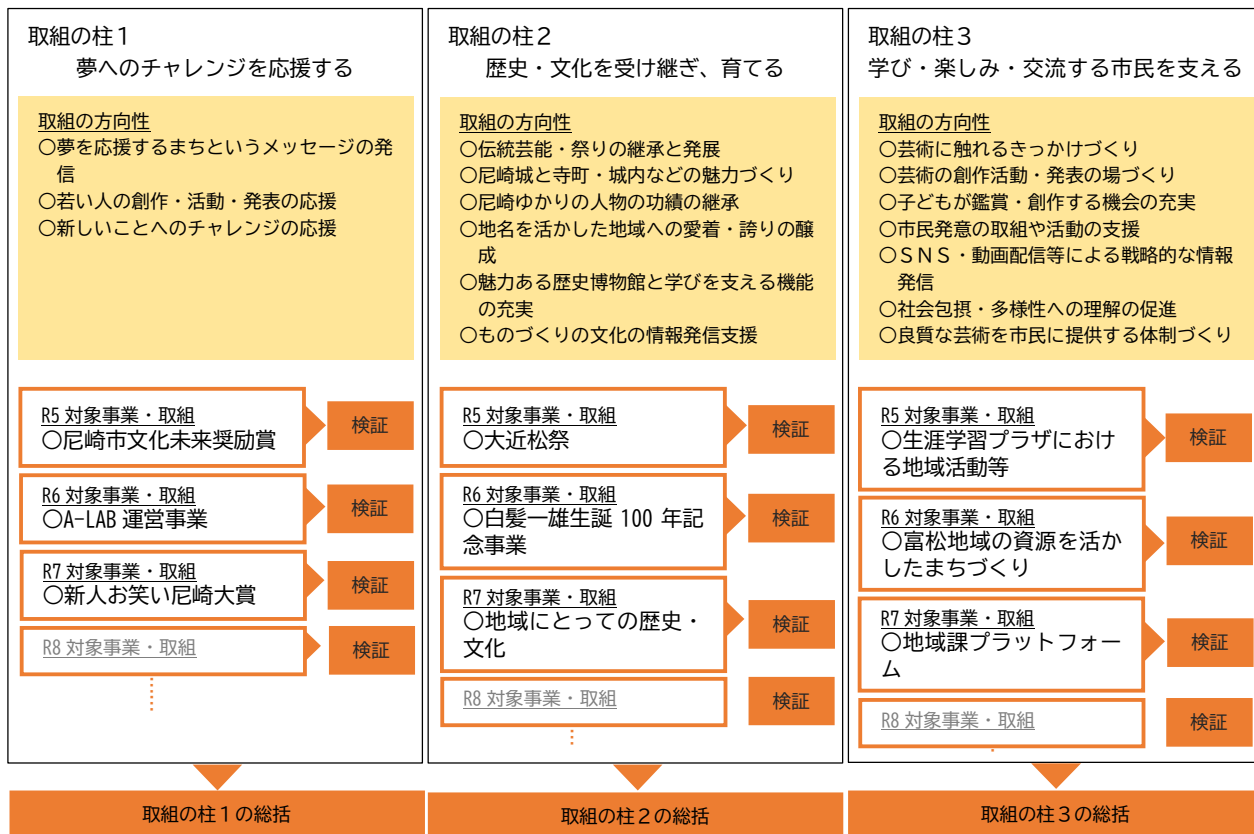
氏名	所属
大永 尉恵	子育てサークル「にこにこ」代表 放課後等デイサービス「ヤシノキ」代表
狩谷 春樹	生田流箏曲「新絃社」三代家元 尼崎芸術文化協会運営委員
田野 葉月	公益財団法人尼崎市文化振興財団美術課主任
辻川 敦	元尼崎市立歴史博物館職員
中田 秀人	アニメーション作家 A-LAB アドバイザー
船木 成記	総務省地域力創造アドバイザー 公立諏訪東京理科大学理事、尼崎市顧問
善見 壽男	富松神社宮司

### 3 令和7年度の実施内容について

ビジョンの3つの取組の柱の方向性に沿った取組が実施されているかを検証するため、毎年度、複数の事業・取組を対象として、懇話会による事業視察及び意見交換等を行います。

令和7年度は、取組の柱1「夢へのチャレンジを応援する」の事業として新人お笑い尼崎大賞を、取組の柱2「歴史・文化を受け継ぎ、育てる」の意見交換テーマとして『地域にとっての歴史・文化とは?』を、取組の柱3「学び・楽しみ・交流する市民を支える」の取組として地域課プラットフォームを取り上げました。

#### 取組の柱の検証イメージ



#### 4 懇話会による検証結果

### 取組の柱 1 夢へのチャレンジを応援する

(目的) 若い人の夢を後押しし、飛躍のきっかけとなる機会を提供することや、年齢を問わず新しいことにチャレンジする人を応援することで、本市が夢へのチャレンジを応援するまちであることを発信するとともに、その活動を広げていく。

### 対象事業 新人お笑い尼崎大賞

新人お笑い尼崎大賞本選会（漫才・コント等の部、落語の部）の視察を行い、意見交換を行った。

#### 事業の概要

お笑いを目指す新人の登竜門として平成 13 年から実施（創設当時は株式会社エフエムあまがさき主催）。漫才・コント等、落語の 2 部門で、新人（※）を対象に公募・選考し、表彰。

本選会には漫才・コント等の部 12 組、落語の部 6 人が出場し、大賞・優秀賞・奨励賞・観客賞が選ばれた。

漫才・コント等の部の応募者数は平成 25 年の 457 組をピークに減少しており、様々な改善をしながら実施している。落語の部は平成 24 年に開始し、令和 2 年以降 30 組台の応募者数で推移している。

【応募者数】漫才・コント等の部 100 組、落語の部 39 人

【入場者数】漫才・コント等の部 91 人、落語の部 39 人

※漫才・コント等の部 プロは芸歴 10 年以内、コンビ結成 5 年以内  
落語の部 プロは概ね入門 5 年以内



#### 検証結果

<p>評価された点</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○出場者のレベルが高く、長年継続して実施していることの意義がある。</li> <li>○小学生が 2 組出場したが、子どもでも大人に混ざって舞台に立つことができる、貴重な経験の場となっている。また、落語の部では出場者に個別の講評があり、出場者の意欲の向上につながるものとなっている。</li> <li>○会場にインタビュー映像が流れているなど、来場者に対する運営上の工夫が見られた。</li> <li>○お笑いが心の安定や社会性につながるといった社会的意義も感じられる。</li> </ul>
<p>課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○応募者にとって魅力が増すような賞金や審査員・講評などの改善ができるとうよい。</li> <li>○出場者を応援する意味合いから、来場者数が増加するような仕掛けが必要である。</li> <li>○落語に親しみのない人にもストーリーなどが伝わりやすいよう工夫がなされるとよい。</li> <li>○他のお笑いの賞とは異なる独自性があるとよい。例えば、YouTube で出場者のフリートークを配信するなど、人物を掘り下げるとよい。</li> </ul>

## 取組の柱 2 歴史・文化を受け継ぎ、育てる

(目的) 過去から受け継がれてきた伝統芸能や祭り、本市ゆかりの人物といった様々な歴史・文化について、学び・楽しみながら、それらが守り伝えられ、まちづくりに活かされていくよう、まちの誇りとして育てていく。

### 対象テーマ 地域にとっての歴史・文化

懇話会メンバーであり、元尼崎市立歴史博物館職員の辻川委員より、『地域にとっての歴史・文化とは?』とのテーマでお話いただいた。市職員も参加できる拡大版として開催し、グループディスカッションも行った。

#### テーマの概要

個人が大切だと思う地域史の一例として、自身が幼少期にまちについて不思議に感じたことが、あまがさきアーカイブズに残っている航空写真などの史料から読み解くことができた経験が紹介された。その不思議に思ったまちの姿の成り立ちとして、阪急の住宅地開発の特徴にも触れた。

市民の関心は多様であり、歴史・文化に関心がある場合だけでなく、現実的課題に対応するため、例えば環境汚染を克服するための学びもある。また、阪神・淡路大震災の直後には築地地区復興委員会が早期に発足し、住民たちが学習・検討し、復興まちづくり案を市に提出した。こうした課題に向き合う学びも生涯学習の一つである。

歴史・文化を意味あるものとするのは、文化財の指定や知名度・集客力だけではなく、個々人の関心であり、個々人が関心を持つ歴史・文化は多様である。



#### 意見交換結果

- 尼崎は歴史・文化のおもちゃ箱なので、市民が発見する仕掛けがあると、歴史・文化が市民の日常生活の中で触発されていくと思う。
- 地域には祭り・神輿が多くある。地域の活性化や多世代の交流、国際的な交流に発展するとよい。
- 歴史を振り返ることでこれからの災害の可能性を考え、まちづくりに活かすこともできる。
- 子ども達に分かりやすく歴史・文化を引き継いでいくことが必要。(尼崎城の活用、映像の活用など)
- 歴史上の偉人でなくても、面白いエピソードに出会うことがある。
- 文化財保存活動はコミュニティの維持にこそ必要で、どうすれば維持できるのかという情報を次の世代につなげていくことも必要である。
- 相互のつながりや世代間の継承は市民が主人公で、行政はサポートすることが大事。

### 取組の柱 3 学び・楽しみ・交流する市民を支える

(目的) 市民が文化・芸術に触れる機会を増やし、文化・芸術を創作・発表できる場づくりを行うことで、学び・楽しみ・交流する市民を支えていく。

#### 対象取組 地域課プラットフォーム

本市の地域政策の経緯、「みんなのホームルーム」(武庫)・「立花かいわい会」(立花)について説明を受けたのち、6地域課のプラットフォームの視察を行い、意見交換を行った。

#### 取組の概要

まちづくりの第一歩として誰もが気軽に参加できる話し合いの場として6地域課が開催。プラットフォーム参加者の相談から生まれた活動や取組もある。

地域を支えるスタッフである地域課職員が、多様な活動をつなげ、地域発意の課題解決や魅力向上の取組を支援している。

【中央】うめにわミーティング・中央おしゃべりデー

【小田】おだらぶ土曜雑談会・おだらぶ水曜日どうでしょう

【大庄】ことはじめかいぎ

【立花】立花かいわい会

【武庫】muko キャンパス みんなのホームルーム

【園田】そのだではなすのだ



#### 検証結果

<p>評価された点</p>	<p><u>プラットフォームの内容や運営について</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○地域課の職員はフレンドリーで、誰でも入りやすい進行だった。</li> <li>○参加してみて、活動に携わっている人と話すことで、自分も関わってみようかなと思える。つながりのきっかけになっている。</li> <li>○参加者の相談に対して、参加者がアドバイスしているのがよい雰囲気だった。</li> </ul>
<p>課題</p>	<p><u>プラットフォームの内容や運営について</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○参加者やテーマが偏っていたり、作られた雰囲気のように感じたりするところがあった。</li> <li>○活動したい人が集まるという形は見えただが、一般市民はなかなか参加しにくいのではないかと。また、本来プラットフォームを知っているべき、地域で活動をしている人にも伝わってなかった。</li> <li>○まちづくりの第一歩目の場として運営されているが、その次の段階として、多様な他者との対話や協力を通じて課題を解決し、新しい価値を創造するような、自立した市民の学びの場となっていくことを期待する。</li> </ul>

文化行政としてのプラットフォームの捉え方・関わり方について

- 市民の中にいる文化的センスのある人の発掘・把握をし、その方々と協働しながら事業をしていくことはできるのではないか。
- 一人ひとりの思いに賛同して一緒になってやる、応援するという視点で見れば、自治・まちづくりという分野と、文化の分野では構造は同じようなものと捉えるべきだろう。

## 全体を通して

ビジョンでは、文化施策を狭義の「文化」ではなく、「地域コミュニティ・学び」の一施策と捉え、取り組むこととしています。

それを受け、懇話会では令和5年度、狭義の文化にかかる事業・取組を検証するだけでなく、社会の基盤として「文化」を捉えることに関して議論を深めました。

令和6年度には、行政がどのように市民主体の活動と連携・サポートすべきか考える一方、“誰かのチャレンジを応援するまち”という本市全体の特徴という視野の中で事業を捉えることも行いました。

令和7年度は、歴史・文化を考える上で重要なことは、個人や地域が大切にしている歴史・文化が多様であると認識すること、そして、歴史・文化を地域で活かすことでコミュニティを維持していくことができるという経験を継承していくことであると確認できました。

また、市民の思いに賛同し、協働していくという構造は、まちづくりでも文化の分野でも同じであると捉えることもできるため、市民の発掘・把握をした上で、取り組んでいく必要性が確認できました。

尼崎市総合文化センターが休館となる令和8年度には、市民が身近な場所で文化・芸術に触れられるよう、アウトリーチ事業を拡充します。この取組により、文化・芸術を通じた学びや楽しみ、交流が地域に広がり、社会の基盤として「文化」がより活かされることが期待されます。引き続きこうした観点からも検証に取り組みます。

## 資料編

### 第1回懇話会の様子

日時 令和7年4月24日（木）午後3時30分から5時30分まで  
場所 尼崎市役所議会棟 西会議室  
出席委員 大永委員、狩谷委員、田野委員、辻川委員、中田委員、船木委員、善見委員

#### 議題

- ・「令和6年度尼崎市文化ビジョン（第2次）推進懇話会報告書（案）」について
- ・施策評価について
- ・令和7年度実施内容（案）について
- ・地域課プラットフォームについて<説明>

### 第2回懇話会の様子

内容 地域課プラットフォームの事業視察

開催日	プラットフォーム名	出席委員
5月10日（土）	おだらぶ土曜雑談会	辻川委員
5月13日（火）	立花かいわい会	中田委員、善見委員
5月15日（木）	muko キャンパス みんなのホームルーム	田野委員、善見委員
6月7日（土）	おだらぶ土曜雑談会	田野委員
6月19日（木）	muko キャンパス みんなのホームルーム	大永委員、狩谷委員
6月21日（土）	ことはじめかいぎ（大庄）	田野委員

### 第3回懇話会の様子

日時 令和7年7月30日（水）午後1時から3時30分まで  
場所 尼崎市役所議会棟 東会議室  
出席委員 大永委員、狩谷委員、田野委員、辻川委員、中田委員、船木委員、善見委員  
※（公財）尼崎市文化振興財団職員がオブザーバーとして参加

#### 議題

- ・地域課プラットフォームの視察について

#### 意見交換の様子

「地域課のプラットフォームが、文化・芸術を活用して情報発信やコーディネートに取り組める場となっているか」

- ・武庫東、小田南、大庄北の3か所のプラットフォームを視察した。武庫東は参加人数が多かったし、流れが確立されていて意見も出やすいと思った。他のプラットフォームは、参加者やテーマが偏りがちなところもあった。「文化・芸術を活用…」というのは参加したものの中にはなかった。地域課が文化・芸術という方向性をもっているということではなかった。公的な機関である地域課が相談にどこまで関わりを持つのが気になった。小田南の参加回では障がい者の施設の方が2人おられたので専門的な話となったが、他の参加者がいた場合の関わり方は難しいかなと思った。
- ・武庫に参加したが夜で人数が少なかった。つながっている人達が参加していたので、なかなか飛び込んでいけないんじゃないかなと思う。ジャグリングの方が参加していて面白かった。一人の方が、地域の自転車屋さんが老齢のオーナーばかりで不安だと言っていてみんなで考えた。そういった誰に言ったらよいか分からないようなことを言う場があるのはいいなと思った。あと、チェックインでは、携帯の検索画面で「し」で出てくるものについて話すということをしていたのが面白かった。地域課の職員はフレンドリーで、軽やかさを感じた。参加者はあま咲きコインももらえて驚いた。私はサマセミに携わっている方と話し、サマセミに広告を出すことにした。インスタや市報で流れてきても出そうと思わないと思うが、携わっている人と話すことで広告を出そうと思えた。
- ・（「サマセミの授業に出たらどうか？」を受けて）私も来年は考えようかと思う。なかなか一歩踏み出せなかったのが、行ったことで、してみようかなと思えたことが私にとってはよかった。知り合いの学童の先生も来たが、何かしら行政に関わっている人しか来ていないかなと思った。本当の一般市民が来ていなかった。カフェじいの雰囲気はよかった。
- ・以前から参加したことがあるし、中央北ではゲストで話したりもしたが、印象としてはどこかで活動している人が集まっているイメージ。武庫西は夜だったので人数も少なかった。参加した人のグループチャットがあるのが面白かった。大きな課題や小さな課題を2人で会話をしている感覚で話すのが面白い。地域課職員で若い人が多かったから、若い人のノリで楽しくできたかなという印象がある。活動したい人が集まるというのが見えてきたが、身内感があるのは悲しいなと思った。私もほとんど知っている人だった。一般的な市民にはハードルがまだ高いので、横で小さなイベントがあるとか、市民が食いつくようなものがあればいいかなと思う。ママカフェをしたいという話をうめにおミーティングで話したが、またやりたいという人はハードルが高いので、プラットフォームで賛同者を募ってできるとよいと思う。また、地区によって色が違うと思った。
- ・小田の土曜雑談会に参加した。メンバーが固定気味だったが、地域課職員に聞くと、土曜雑談会はコアな人、キューズモールで水曜にしている会は多くの人があることを狙ってしているということだった。内容は相談を持ち掛けるスタイルで、常連のような参加者がアドバイスしており、どんぴしゃりな回答が返ってくる訳ではないが、よい雰囲気だった。一般市民が来ないという意見があったが、情報交換したい活動している人が来る位置づけなので、多くの市民を呼ぶというのとは位置づけが違う。評価のポイントとしては、ネットワークができる場として機能しているかということ。私はこども食堂「まあい食卓」を最近手伝っているが、その活動者もプラットフォームを知らなかった。参加したら参加してよかったと言っていた。プラットフォームとして機能してはいるが、本来知っているべき人にも伝わっていなかったというのは課題だと思う。最後に、市も関わっているが、できれば参加者同士で自己解決して欲しいと思っているのではと思う。尼崎市くらいの規模の自治体で、どこまで市民に寄り添えるのかは微妙だと思う。一般市民にとって行政はハードルが高い。全部にYESは言えないが、できないことも分かりあえる関係、平場な関係、そういうスタンスの職員が増えていけばいいと思う。

- ・何と表現したらよいか、つくられた雰囲気のようにも感じた。職員の進行は、誰でも入りやすい進行でにこやかだった。いつもプラザに来ている雰囲気の女の子が雑談をしていたが、静かにしてと注意されることもなく、面白い空間だと思った。参加者の相談に対して色んな世代の参加者が答えていた。普段接する機会の少ない世代に向けて話をするのは面白く、つながりのきっかけにはなると思う。また、皆、話の中に笑いを入れようとする事に感心した。高校生でも初めての人でも打ち解けやすい話の流れを考えている。市職員が尼崎市の推しを教えてくださいと言い、挙手ではなく、端から順番に皆が答えていった。それよりもせつかく狭い地域から集まっているので、身近な地域で困っている雑談を言える場所だとよい。また、名物のような人、瀬戸内寂聴さん、神主さんのような人がいると話しやすくなると思った。
- ・相談ごとに応える、出会いの場所ではあるが、文化ビジョンの「取組の方向性」のテーブルには全くのついていない感じがした。視察の狙いはい何か理解できなかった。もう少しプラットフォームの事業そのものに文化を醸し出す工夫が欲しかった。文化ビジョンの中では、「学び・楽しみ・交流する市民を支える」という柱であり、文化・芸術体験が柱の中からなくなってしまっているので、地域課の取組の狙いがぼやけたのではないかと思う。プラットフォームの運営の努力のあとは感じられたが、文化ビジョンに迫ろうとするとまだまだ。縦割りがあるから横串ができていない。自分が社会教育委員であったこともあり、プラザには公民館が持っていた機能が現れてこないと残念なところがある。プラットフォームが市民の生活文化そのものまで、掘り起こしながら、市民の力が上がっていくようなところを期待していた。まず市民の力を耕して理解しておく必要があり、それがあって初めて文化行政のアプローチができるのでは。地域が学習の場だと言っているが、行政がついていないと思う。地域課題を本当に解決していくのは市民なので、市民の力が増えていかないといけない。自立している市民をいかに社会教育していけるか、各地区の地域課には生涯学習を市内全域に花咲かしていく努力をお願いしたい。
- ・地域担当職員の研修をしている立場からも発言する。前回の職員のお話の通り、現在の地域振興体制になる前に、尼崎市は、飯田市の公民館に職員を派遣して、学びや社会教育を起点とした、協働的な地域づくりを学んできたところ。飯田市では困りごとがあったら「公民館に相談に行ったら」と言ったり、「公民館してくる」という言い方もしている。ハコとしての公民館ではなく、公民館活動そのものが、公民館という言葉になり、まさに動詞になっているということ。その理想形を考えて、尼崎市の公民館も地域の困りごとや課題解決の相談相手になるということが、地域振興体制の再編時、10年くらい前の目標だった。そのような行政と市民や地域との接点としての入口を作ろうというのが、今回皆さんに見ていただいたプラットフォームだと思う。それまでは、尼崎市も他の自治体と同様に、公民館やその他の社会教育施設も含め、管理運営者として再任用職員等を配置していた。そういった意味で社会教育領域を立て直すにも、立て直すための組織の中に資産が残っていなかったこともあり、公民館を教育委員会から市長部局に移し、公民館事業と支所事業を一緒にした上で、地域自治を育むための役割を追加したのが、地域課職員である。それまでは、地域に寄り添う職員がいなかったし、若い職員がいなかったのも、そのような状況から見ると、委員には、まだまだ大目に見て欲しい。もちろん、まだまだ、未熟なところもある。まさに、本日お集まりのみなさんのように活動している方が一緒に、「公民館する」ならず「プラザして」欲しい。委員ご指摘のような社会教育的意味では、カフェじい事業は、メンバーの学びから活動に移ったところまでは良かったが、その次のステップ、後輩を育てるとか、他の地域に展開するなどの、学びのプロセスで得た自治的な活動を、地域担当職員が伴走できるかが重要かと思う。

プラットフォームを皆さんに視察して欲しいと思ったのは、一昨年、この懇話会で講演をいただいた、京都大学の佐野教授の視点、政策やまちづくりにおける分母としての「文化」を耕しているのがプラットフォームという位置づけとしてみていただきたかったから。本市における総合計画の施策の1番に、地域コミュニティが置かれていて、かつ、そこに文化や協働的観点が含まれていることの意味を理解して欲しかったからである。ただ、本日のみなさんの発言や視点は、どうしても「分子」の一つとしての評価軸になってしまっている気がする。その意味では、文化領域の話題が各プラットフォームで話題にならなかったのは仕方がないが、話していた内容やその関係性が、尼崎市地域の特徴、生活文化としての協働やパートナーシップだと思ってもらいたかったところ。その視点で見たら、みなさんはどう感じただろうか。もちろん、みなさんご指摘のように、プラットフォームの参加者が固定しているのが課題なのと、場の作り方として、演技しすぎというところもあろうかと思う。コロナもあって、地域の方々と地域課が出会うのは、ゼロスタートとなってしまっているのかなと思うが…。まさに、この文化ビジョンでいうところの、分母としての文化、まさに地域の有り様が、このあとどうなっていくのかなというところ。かつてから比べると地域と行政の距離が近くなったのではないかと思うが、まだまだ途上だと思う。

- ・「ごんべえが種まきやカラスがほじくる。三度に一度は追わねばならぬ。」とまちづくりの観点で思っている。よいものを育てようと思って、耕して種をまいてもカラスがやってきて、その種を食べてしまう。発芽に至らないので、そのカラスを追い払わないといけない。何事も時間がかかるのは承知しているが、市民として関われる隙間はたくさんあるなと思った。行政には文化振興の戦略があるのではないかと思うが、地域課のプラットフォーム視察からはその文化振興行政として文化・芸術を活用した戦略は感じ取れなかった。
- ・他の自治体で市の職員がファシリテーションできるって、ないと思う。それはほめてもらってよいと思う。
- ・それでも市職員が、尼のいいところを市民に順番に言ってもらうのはどうか。
- ・(事務局) 委員が視察していただいた時期に、市制 110 周年の担当部署が、尼崎の推しについて意見を集めるために 6 地区を回っていた。
- ・委員のその違和感は大事だし、職員も感じないといけない。委員は、公民館事業的なスタンスで、市の側がもっと積極的に文化・芸術の場作りにコミットすべきでないかというイメージか。今以上にそれをミッションとする職員を配置するリソースはない。そこまで市に求めることで芸術文化は生まれるのか。それは市民の方に投げられていることだと思う。それよりも、文化施設は A-LAB も総文も歴博もあるが、一体として見える化されて提示されていない方が問題だと思っている。
- ・委員の発言内容は、特に全体の見える化は、まさに、ここの文化のセクションの仕事だと思う。

「対話や参画によりどのようなことが期待できるかを考える」

- ・本市にも各地域には文化的なセンスのある人が一定数はいると思っている。行政のベースのところに文化的な市民がいることの確認があったらいいのにとずっと思っている。地域課のプラットフォーム事業も文化的センスのある人の発見の機会になっていくと思う。文化施設がなくなっていく今だからこそ、市民の中にいる文化的センスのある人の発掘・把握が第一に必要であり、その人らが本市の人的財産になるのではないか。そんな市民の方々と参画したり協働しながら事業をしていくことはできるのではないかと思う。本市の市民に期待したい。尼崎は面白い人がいると視察したプラットフォームでも話題になっていた。市民の人柄に期待できる。そういった人達との会話や対話

が起こればいいなと思っていた。遠い話ではなく、できる話だと思う。

- ・拠点がなくなると不安になるが、ハード整備的な事情としては仕方がない中で、それを逆手にとって、この期間にやるべきことをしっかり整えることだと思う。可児市の話聞いたが、実は尼崎もピッコロシアターやティーンズサポートチケットなど、個別には紹介いただいた要素や事業は、実は全部あると思う。ただ、それがまち全体の捉え方ができていないのが、課題だろう。拠がないこのタイミングで、まさに尼崎の市民力、文化力を全体で見られる形にプロデュースできるとよいだろう。社会教育施設等は、たくさんあるが、それを委員がおっしゃるように、見える化や、事業のパッケージとして伝えることができるか。
- ・アートという言葉の語源は、ラテン語では、まさに「生きる技術・表現する」ということで、鑑賞型のアートだけではなく、地域の人が自分の思いを表現するということも含めて、捉えるべきだろう。市民一人ひとりの内面からあらわれ出てくるものに、賛同して一緒になってやる、応援するという視点で見れば、まさに、自治・まちづくりという分野と、文化の分野では構造は同じようなものと捉えるべきだろうし、尼崎市の文化ビジョンはその視点に立って策定されている。拙い例かもしれないが、インディアンのトーテムポールは、アートとして作っていた訳ではないと思うし、縄文土器もあの紋様をはじめから装飾としてやった訳ではなく、魂の表出として表現したものであり、それを後世の我々が、文化やアートとして捉えているのだろう。
- ・文化振興財団は、今回この改修のタイミングで、ビジョンとミッションを改めて再定義すべきだと思う。(法人名が) 総合文化センターから文化振興財団に変わったが、まだまだハコの運営を中心に考えているのでは？と感じるので、まさに今後、ハコとしての拠がないときに、地域の文化を振興するビジョンとミッションを再定義して、地域の文化、分母としての文化を含め、どのように振興してゆくのか？それを書くだけではなく、実際にどのように行動してゆくのか？そして、その動きを市がどう支援し、伴走するのか。文化ビジョンは総論的に書いているが、具体的に役割や、行動などを検討すべきだと思う。
- ・総文に講座を持っていたり、集っていた人たちが不安であれば、サイバー空間で、バーチャルに集えたらよいのでは。尼崎のまちで、文化に関わる人たちの人物図鑑、市全体の文化活動、空間の全体が一目で見える機能を持たせられたら良いのでは？そういう中でプラットフォームやサマセミの役割も見えてくるだろう。さまざまな尼崎の文化活動が、一連つながっているという視点で束ねることだろう。拠がないがゆえに、今しか、そういうことはできない。財団も地域のことを本気で考えるか、拠がない中で、地域の文化をどう耕すかということが必要となってくる。本気で考えて欲しい。拠がない間に腕力をつけておけば、オープンしたときに何倍ものことができるはず。大いに期待したい。

## 第4回懇話会の様子

日時 令和7年9月26日（金）午後1時30分から3時30分まで

場所 市政情報センター セミナールーム

出席委員 大永委員、狩谷委員、田野委員、辻川委員、中田委員、船木委員、善見委員

※市政課題研修としても位置付けて開催（市職員も参加）

講演「地域にとっての歴史・文化とは？」

※辻川委員より講演

※説明資料抜粋

### 2 個人史と地域史



阪急塚口駅北側 1964年 小川弘幸氏撮影

### 武庫之荘

### 塚口



1942年撮影 大阪市所蔵航空写真

### 3 歴史・文化の多様性



摂津職河辺郡猪名所地図



近松門左衛門墓



武庫大橋

**伝統的な歴史**  
歴史遺産への関心  
や学び

**過去**  
地域資源を学び  
現在に活かす

**歴史文化**  
市民の関心の多様性

**現実的課題**  
あまがさきアーカイブスの利用例から

**近代化や建築遺産**  
への関心

**環境汚染や自然**  
災害を学び克服  
する

**現在**

何が地域の歴史・文化を意味あるものにするのか？

- 客観的尺度  
例：指定文化財という概念  
国重文 県指定 市指定
- 知名度・集客力



本興寺開山堂と太刀銘恒次（数珠丸）  
いずれも国指定重要文化財

### 後半 ミニワークショップ

14:30~14:50 グループディスカッション・発表

- グループにわかれて、次のことを話し合ってください
- 自身が関心がある、大切だと思う（地域の）歴史・文化とは何ですか？
  - 活かしていくべき尼崎の歴史・文化とは、何だと思えますか？  
その活用の仕方、取り組みのアイデアがあれば教えてください

14:50~15:10 発表

15:10~15:30 意見交換 講評 閉会

## 意見交換の様子

- ・(狩谷委員、中田委員グループの代表) 自分が住んでいる地域について話した。レコード屋さんや古い本屋さんがあったこと、電灯がなくて怖い思いをしたことなど、マイナス面の思い出も話したが、現在はその風景がきれいになり、友達の家がパーキングになったりして、都市開発としては良いことだが寂しいという話をした。
  - ・(狩谷委員、中田委員グループの代表) まちを歩いていて、何だろうと思うものがある。例えば武庫大橋の河原にきれいな花が咲いている。そういった知っているけどよく知らないことを市民に伝えられたら興味を持ってもらえるのではないかと思った。
  - ・(大永委員、田野委員、善見委員グループの代表) 委員が武庫地域で五輪塔を見つけ、そのあたりが荘園地であったことが分かったとのこと。今日の話聞いて尼崎は荘園率が高いことが分かったとのことだった。別の委員からは、子ども達が色々なものに関心を持ち、素直な目線が面白く、大人も子ども達から文化を発見するという話があった。自分が子どものときから教わってきたことが感じ取れるところもある。また、子どものときに不思議だと思っていたことはたくさんあった。大人になっても気づく、発見することで、有形・無形の歴史・文化が体感できる。尼崎は歴史・文化のおもちゃ箱なので、市民も発見する仕掛けがあると、分母としての歴史・文化が日常の市民生活の中で触発されていくと思う。
  - ・(大永委員、田野委員、善見委員グループの代表) “歩く歴史の人”とも言える委員のお話やアイデアを取り入れて、次の人につなげることをしないといけないと思った。
  - ・(市政課題研修参加者) 地域で秋になると祭り・神輿があり、百メートルしか離れていないところにまた別の祭りがある。地域の活性化や多世代の交流、国際的な交流に発展すれば、尼崎が活性化する。
  - ・尼崎市総合文化センターの開館のために岩井直博さんが作曲した曲があることが分かったが、聞いたこともない。音源を探す作業を今しておかないと伝えられないと思った。
  - ・(市政課題研修参加者) NHK のプラタモリでまちの誕生秘話や形成された経緯が分かるが、歴史を振り返ることでこれからの災害の可能性やまちづくりに活かすこともできる。
- (市政課題研修参加者)・尼崎市に初めて住んだ人達が尼崎をよく知る、好きになるために、辻川委員がお城先生になったという話も聞いたが、子ども達に分かりやすく尼崎の素晴らしさを伝承し、歴史・文化を引き継いでいくことが必要ではないか。尼崎城をもっと活用して尼崎の素晴らしさを伝えることも必要ではないか。
- ・(市政課題研修参加者) 地域の建物や踊り、地域に根付いたものの活用の仕方として、映像で歴史を紹介しながら子ども達に伝えていくことも考えられる。
  - ・(市政課題研修参加者) 昭和の初めに朝日新聞が飛行機の東回りと西回りのどちらが早い懸賞をかけてやったということだが、それをした記者の新宮寿天丸さんは大庄出身、大庄西の素戔鳴神社で村人 400 人が集まって壮行会をした。歴史上の偉人ではないがすごい人をアピールできたらと思う。
  - ・(市政課題研修参加者) 武庫大橋はモダニズム建築として西宮側で PR されてしまっている。

## (辻川委員)

- ・武庫大橋の河原の花は、「あまがさき花のまち委員会」という花の活動の一環ではないか。そういう情報を発信することは市に求められていることかもしれない。

- ・まちの変化に残念な部分があるという意見もあったが、長く住んでいるとそういった感覚にもなる。
- ・祭りについて、近くに別の村の別の祭りがあるということだが、それが活性化や国際交流につながればという話があった。
- ・子ども達にどう伝えていくか。総合文化センターの話もあった。
- ・(市政課題研修参加者) 文化振興財団では、依頼を受け、田能遺跡音頭の踊り方を知る人がなくなりそうなので、それを学ぶ映像を制作したこともある。

(辻川委員)

- ・地域の伝統的なコミュニティは終わりかけている。文化財保存活動はインバウンドや観光の目玉になると言われているが、その論点は本当にそうなのか。日本の中で、村じまいもあれば、お祭り、神社仏閣が維持できないところもある。私は、地震後の能登半島に行き、現地の文化財を石川県教育委員会や文化財防災センターに引き取り預かる活動をしたが、いずれ元に戻せるのか心配がある。災害後の復興計画は多くがもめるが、それは自治体が短期間に復興計画を作り、住民に勝手にしていると思われる場合が多い。尼崎では築地の住民が自分たちで時間をかけて作る、行政側もそれを受け入れることができた。築地のまちは変わったがコミュニティは維持できている。どうすれば継承できるのかという情報を共有できることも大事で、やっていかないと、次の世代につなげていけない。
- ・60代が若手という団体も多い。終わる団体は終わってもよいが、文化的な営みがなくなってしまうのもどうなのかと思う。
- ・五輪塔を発見して荘園の跡だと気付いた、子どもの目線の気づきを大人になっても持ち続けることも私の今日の話に近い目線だと思う。
- ・大きな話よりも、一番大切なのは素朴な目線や継続性で、相互につながっていったり、世代的に継承していくことが大事だと思う。主人公は市民で、役所がサポートすることが大事だと思う。
- ・猪名寺自治会の内田会長が自治会活動を熱心にしており、バリアフリーなどに取り組んでいるだけでなく猪名寺の歴史の取組も熱心に行っている。それはなぜか聞くと「まちを好きにならないと、まちをよくしようと思わないでしょ」ということだった。まちに寝に帰るだけでなく、活動する人を増やしたい、そのために歴史や文化だということだった。
- ・内田さんの話も最後にあったが、私は「そのまちを好きな人に会うと、そのまちを好きになる」というのがまちづくりの原則だと市役所の中で、伝えてきている。市民の方々が自分自身が住むまちをいいなと思って過ごせる日常の創出が、まちづくりの基本だと思って政策全般を見てきた。
- ・R5年度に懇話会にお呼びした佐野先生が、分母としての文化という話をしていた。生活文化、日常文化、記述されないようなものは、日常の営みこそが地域の文化、生活文化の基盤で、アートの、いわゆる制度化されたり、鑑賞芸術的なものは分子ということで、文化政策的には、その両輪が重要だと思う。尼崎市の文化ビジョンはその分母と分子の両面をしっかりと書いている。また、現在の総合計画の「施策1 地域コミュニティ・学び」の分野の中に、文化領域が捉えられていることも含めて、地域における日常の暮らしや営みが分母としての、文化、そのまちらしさやアイデンティティのベースを創ると思っていただいて、各部署で取り組んで欲しい。

## 第5回懇話会の様子

日時 令和8年1月18日(日)  
落語の部 午前10時30分から午後1時30分まで  
漫才・コント等の部 午後4時から午後6時30分まで  
場所 アルカイクホール・ミニ(尼崎市総合文化センター)  
出席委員 大永委員、狩谷委員、田野委員、辻川委員、中田委員、船木委員、善見委員  
内容 新人お笑い尼崎大賞の事業視察

## 第6回懇話会の様子

日時 令和8年2月27日(金)午後2時から4時15分まで  
場所 市政情報センター セミナールーム  
出席委員 大永委員、狩谷委員、田野委員、辻川委員、中田委員、船木委員、善見委員  
※(公財)尼崎市文化振興財団職員がオブザーバーとして参加

### 議題

- ・新人お笑い尼崎大賞について
- ・令和8年度実施内容について

### 意見交換の様子

- ・落語の部に参加したが面白く拝見した。空席が目立ったので入場者がもっと入ると出演者の気持ちも上がるかと思う。アンケートで満足度100%はなかなかないと思う。米二師匠から一人ずつ講評いただけるのは出場者にとってよい場だと感じた。香川県の子がすごかったし、楠木亭さんが大賞だったのは嬉しかった。一つ気になったのが、出場者の名前が聞き取れないところで、司会者のマイクを通じた声が聞き取りにくいのと、出場者の振り仮名が欲しいと思った。米朝一門がアルカイクで勉強会をしており、(故)米朝さんなど落語家が住んでいるので、尼崎で落語がもう少し広がればよいと思う。落語は漫才・コントに比べると若い人には難しいのかなと感じる。落語は話を知らない分からないので、話の予告など、分かりやすく親しみやすくなっているとよい。
- ・応募者数が減少傾向ということだが、予選の倍率や出場者のレベルから継続していく意義があると思う。落語の部の観客数が少ないのは残念。落語の部の出身や年齢層が幅広く、賞が浸透しているのと、オンライン申込の効果と推測した。持ち時間が長いようにも感じたが、専門家の判断にお任せしたい。出場者についてもう少し情報があるとよかった。令和8年度からはキューズモールを想定しているということなので、来場者が見込めるとは思うが、プロではない方の漫才・落語を聞くという心理は、応援や見守りということだと思っているので、そういう人に来てもらう仕掛けがいると思った。尼崎の土地柄とも合うと思う。長いスパンで応援してくれるサポーターができると面白いと思った。
- ・(オブザーバー) 予選8分、本選15分でしているが、出場者からは15分ネタができてうれしいという声を聞いている。予選は様々なレベルの人がいるので、審査員に15分見ていただくのは長い、5分では短い、その間をとって8分で評価をしている。8分でもう少し見たいと思えるかどうかを審

査の視点の一つともなっているようだ。

- ・落語の部を拝見した。この事業は、著名な芸人になる人を見つけるのが目的なのか、裾野を広げるのが目的なのか、楽しいイベントをするのが目的なのかを確認したいと思った。進行の中で、実行委員会の委員が紹介されるが来ていないので、あまり力が入っていないのかなと見えてしまう。誰が本当のプランナーなのか。
- ・(オブザーバー) エフエムあまがさきが主体となって始まり、お笑いの枠に縛られずタレントを発掘するという目的だった。そのため、漫才だけでなく腹話術師なども出場していたと聞いている。そういった方が尼崎から羽ばたいて、広げていけたらという狙いだった。その後、文化振興財団の事業となり、また、寄席というよりも競技のお笑いが広がってきて、発表の場が求められるようになり、現在は若い人が成果を出せる場として提供している。来場者が少ないというのは感じているが、何を重視するのか、上質なお笑いを届けるといことだと応募資格が変わってくる。今はアマチュア、新人を発掘することなので、応募資格に制限をつけている。
- ・市制 110 周年に向け、市の幹部職員だった方に話を聞くということをしている。元副市長で文化振興財団副理事長の村山氏に話を聞いた際、文化に力を入れることで、非認知能力、生きる力を与えることになるとおっしゃっていた。だから公共として力を入れているということだと思う。事業に公共が関わるのは、地域にとって、社会にとっての意義ということだと思う。
- ・茂木健一郎氏が、日本のお笑いは社会風刺がないという発言をしてバッシングを受けていたが、世界と比べたらそうだと思う。もう少し社会的意義を意識してもよいと思った。
- ・落語の部を拝見した。私は落語をかなり聞くが、好きなのは米朝師匠。完成度はそれと比べてしまうところはあるが、この事業を続けているのは意味があると思う。漫才の部は放送で拝見した。タイトルのことが話題になっていたが、タイトルはなぜこうなっているのか。
- ・(オブザーバー) 私もタイトルを間違える時があるが、皆さん感じているのだろう。今回はそこをうまくいじってくれた。事業開始時に名前を定めたまま実施してきている。
- ・尼崎でこの事業をする独自性が見えた方がよいと思う。委員の発言のように、他ではテレビに出ることを前提にすると過激なネタはやりにくいだろうが、尼崎では賞が取れるとか、特徴付けがあってもいいのではないか。
- ・落語の方は、まくらの方が受けがよいというところがある。そう考えると、フリートーク、エピソードトークの枠があってもよいと思う。日常の面白いことを話す方がお客さんの受けもよいのではないか。尼崎でもすべらない話をしたことがあった。
- ・事業の目的がタレントの育成と発掘なので、優秀なネタを決めるのではなく、面白いタレントかどうかをもっと見たい。前と後をフリートークで公開するなど、本選の前に見てから来た方が楽しめるんじゃないかと思う。面白いと思った人が後に何を話すのかなど、人となりが見える方がよい。YouTube だけでできることなので、したらどうか。
- ・舞台セットが地味だと思った。お金がかかると思うが何かできたらよい。尼崎だからこの背景、例えば、書道部が書く一文字など。
- ・見られなかったところは放送で拝見した。以前に落研選手権の視察をしたことがあるが、今回のレベルは高かった。落語は小学校 5 年生、漫才・コントは 3 年生と、子どもが出ており、こういった場を経験するのはよいことだと思う。
- ・ベイコム番組の出演権ということだが、財団の YouTube があるので、YouTube を活用してもよいのではないか。

- ・(オブザーバー) ベイコムではレギュラー番組という約束はせず、ロケやナレーターなど、何らかの出演をすることになっている。その後のつながり次第では、レギュラー番組ということもあり得るかもしれない。今回は、お笑い大賞について振り返る収録をしており、ロケに行く予定もあると聞いている。
- ・出演権は、出場者のモチベーションにつながると思う。
- ・尼崎の文化ビジョンとして、新人を発掘するということは、市民向けに文化行政として発信していくことはクリアしていると思う。
- ・落研選手権の視察でも書いたことがあるが、遠方から来て宿泊もすると考えると、大賞の単価を上げて話題を広げられたらよい。
- ・投票チケットはいつからしているのか。
- ・審査委員長を著名人をお願いすると、応募したい人が増加すると思う。
- ・(オブザーバー) 投票チケットは、入場料を設ける際に投票券付きとして導入した。
- ・本選で時間が短い人もいたと感じた。
- ・(オブザーバー) 短い人もいたが、多くの方はまくらで調整される。昨年度受賞した方はまくらがよかったところから入り、評価が高まった。会場を見て空気を察知するのも技術、また、キャラクターをどう作品につなげるかということも審査員は見ている。
- ・会場と演者は相互関係だと思う。入場者数が多いと演者も張り切れる。
- ・待ち時間に映像が流れていたのは、編集が大変だと思うが、観客にとってはよかったと思う。
- ・音響は聞きづらいところがあった。
- ・会場の規模感はちょうどよい感じがした。
- ・YouTube では会場の反応が分からないのが残念だった。
- ・(オブザーバー) オーディエンスマイクを置いておらず、YouTube は生配信を滞りなくするのに重点を置いているが、そうした意見も伝えておく。
- ・お笑いのまち尼崎をどのように世の中に置くか、ということで作られた事業だと思う。そして、チャレンジを応援するまちというフレームの中でどう考えるかということ。
- ・また、例えば受賞者が3年後に立派になっていたとしたら、アーカイブになる。人の成長プロセスの伴走としてのコンテンツの作り方として、当日だけを回すということでないアプローチもあるが、人件費や予算に関わると思う。
- ・プロ、アマの考え方は検討してもよいのではないか。プロを目指しているけどプロではない方を対象とすれば、特徴づけになると思う。
- ・落語は新作、古典と一緒に審査するのが難しいとは思った。ただ仕方がないかもしれない。